

# 名取熊野三山

—熊野信仰とその歴史遺産—

本宮社



那智神社



新宮社



# 霊場「熊野三山」

## ●霊場「熊野三山」

紀伊山地の南東部にある「熊野本宮大社」・「熊野速玉大社」・「熊野那智大社」の3社と、「青岸渡寺(せいがんとうじ)」・「補陀落山寺(ふだらくさんじ)」の2寺を核とした熊野信仰布教の中心です。3社は、互いに20~30kmほどの距離を隔てて所在しており、「青岸渡寺」・「補陀落山寺」は「熊野那智大社」と一体となって発展した、神仏習合(神と仏とは表裏一体のものであるという考え)の形態を良く残した寺院です。もともと熊野3社は個別の自然崇拜を起源とするものと言われていましたが、10世紀後半頃には互いの主祭神を祀り「熊野三山」・「熊野三所権現」と呼ばれるようになり、多くの人々の信仰を集めました。熊野三山が広く信仰を集めるようになった直接的な契機には、平安後期から鎌倉時代にかけて時の権力者たちが多く参詣した事や、都からの距離、女人禁制の霊地・霊場が多くあった中で女性も受け入れた点などがあります。時代が進むにつれ武士や庶民にも熊野を参詣するものが多く現れ、室町時代頃には「雄の熊野詣」と称されるほど大勢の人々が参詣するようになりました。



熊野本宮大社



那智の大滝



青岸渡寺



熊野速玉大社



熊野那智大社

## ●東北の熊野信仰

全国には3,000ヶ所を超える熊野仲かりの神社があるとされています。その内の約4分の1が東北地方にあると言われており、北は青森県の北部にまで広がっています。紀州熊野三山から遠く離れているにもかかわらず、熊野信仰が東北地方の人々に受け入れられあつく信仰されていた事が分かります。熊野信仰は、仏教や修験道、地域にあるシンボルの山に対する信仰などと結び付き、その地方の状況にあわせて変化しながら広まっていったようです。各地で信仰の対象となっていた山の周囲や、主要な河川・街道沿いなどには、熊野信仰を広めるための重要な寺社が造られ活動の拠点となっていました。名取熊野三山もこうした寺社の1つであると考えられています。



③寒河江 今熊野社



④南陽 宮内熊野大社



⑤喜多方 新宮熊野神社



①大崎 宮沢熊野神社



②棚倉 八槻都々古別神社

# 名取熊野三社と熊野信仰



## ●名取熊野三社の成立と名取老女

名取熊野三山の成立については、保安年間に名取老女によって勧請されたとの説が有名です。永正2年(1505年)に成立したとみられる「熊野堂縁起」(江戸中期写本)によれば、

「昔、名取郡に1人の老女が暮らしていました。熊野三山を深く信仰し毎年紀州熊野に参詣していましたが、年老いてそれも叶わなくなり、保安4年(1123)に、名取の里に熊野三山を勧請して、祭礼を欠かしていませんでした。」

一方、保延年中(1135~1141)に奥州巡遊を志した熊野山伏が、旅の安全を祈願し本宮証誠殿で一夜のお籠(こも)りをしていた所、「名取老女を訪ねてみよ」とのお告げがあり、目覚めて枕元を見ると一枚の桐(なぎ)の葉があり、虫食いの跡が「みちとおし ともいつしか おいにけり おもいおこせよ われもわすれじ」と言う一首の歌を記していました。これを持って名取の里へ来た山伏が老女に夢告の事を話すと、老女は名取に勧請した熊野三社へ山伏を案内し、山伏の勧めで祭文を唱えたと熊野権現の使者である護法善神(ごほうぜんしん)が現れ、老女の頭に降りて光彩を放ちました。その後、この様子を見ていた村人達も熊野三社を祀るようになり、老女の死後は証誠殿(しょうじょうでん)の傍らに老女の宮が祀られました。」

という内容で、名取老女が熊野三山の成立に深く関わっていた事を記しています。この名取老女については、熊野三山関連の記録類にその名が登場しますが、出自や性別等それぞれ異なる記載も見受けられます。名取熊野三山の成立時期については、縁起に記された年代と概ね同じ平安時代終わり頃と考えられています。



熊野堂縁起(熊野神社文書)



1 名取老女の宮

## ●名取老女と鳥の宮

下余田熊野三社から北西約1.5kmの地点(仙台市太白区中田の前田地区)には、名取老女の屋敷があった場所であり、老女が紀州から熊野三社を勧請する際に、先導となった熊野の神鳥(八咫鳥: やたがらす)が祀られたと伝わる鳥の宮(からすのみや)や、明治42年(1909)年に中田村神社へ合祀された、名取老女を神格化してお祀りした老女の宮跡(老女神社跡)があります。



## ●御神木 ナギの大樹

熊野の御神木で、熊野速玉神社境内に国天然記念物の樹齢1,000年の大木があり、参詣者はその葉を頂いて禱る習わしがあります。

## ●下余田の熊野三社

江戸時代の安永2年(1773)に書かれた「下余田風土記御用書出」には、下余田村の熊野三社は、名取老女が年老いて熊野詣でが出来なくなったために、この地に小さな熊野社を建て毎日参拝していた古社であり、その後、紀州熊野の神託を受けた老女の徳が急にひろまり、保安年中に熊野堂村・吉田村に熊野三社が建てられたという伝えが記されています。また、下余田三社の近くには、名取老女の墓とされる場所もあります。



2 名取老女の墓



3 下余田 本宮社



4 下余田 新宮社



5 下余田 那智社



6 鳥の宮



7 老女神社

# 熊野本宮社と熊野信仰



## ●熊野本宮社

本宮社は、本宮十二神とも称されており、主神には、家津御子神(けつみこのかみ)という作物の神がお祀りされています。本宮社が現在の地に移されたのは万治元年(1658)で、以前は現在地から南に500mほど離れた小館と称する山上に鎮座していたと伝えられています。社殿は、明治38年(1906)宮城県へ提出された「熊野本宮社調査書」によると、元禄元年(1688)に改築、長床(ながとこ)は延宝4年(1690)改築となっています。

また、当社所蔵の「名取熊野本宮永留(ながとめ)」によれば、永禄6年(1563)伊達晴宗公より本宮社に神輿(みこし)、御神馬、御馬具一式が奉納された事が記されています。伊達政宗公の仙台開府以降は、元禄3年(1690)4月8日の御祭礼以後、仙台藩から毎年玄米3石5斗を拝領することとなり、あつく保護されていた事が分かります。

この他、現在は行われていませんが、当社には、下増田北釜へ神輿を運ぶ「お浜下り」や、流鏝馬(やぶさめ)などの神事も伝えられています。



昭和50年の熊野三社付近の地形



9 小館跡 (熊野本宮社旧社地)



本宮社から見た小館跡



8 名取熊野本宮永留



小館跡出土の古瀬戸

## ●熊野小館跡

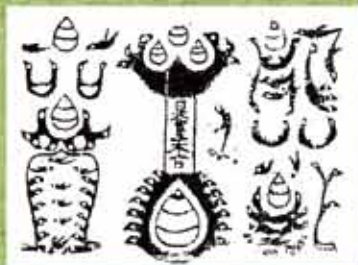
小館跡は、熊野本宮社の鳥居から南方の標高124mの丘陵突端にあったと言われています。昭和58年の調査から、館跡の範囲は東西約100m・南北約200mで、頂部の約10m四方の方壇状の高まりを中心として円郭式状に3段の曲輪(くるわ)がめぐるものと考えられています。頂部や曲輪から建物跡などは発見されませんでした。頂部の方壇状の高まりの南側から、古瀬戸の仏花瓶と古銭などが発見されています。

## ●熊野堂十二神鹿踊

熊野堂十二神鹿踊(くまのどうじゅうにじんししおどり)は、熊野本宮社に付属するもので、文安年間(1144~1148)に米沢の山伏修験者(やまぶししゅげんじゃ)により伝えられたものと言われており、江戸末期に一時中断されましたが、明治になり再興され現在に至っています。伎楽(ぎがく)系の二人立ちの獅子踊りとは異なり、旧仙台湾内に分布する一人立ち羯鼓踊(かっこどり)の多面立(たかまがたて)の一種で、その衣装や芸態は中でも独特なものとして残っています。古くは、お盆の頃に祖霊供養のために舞われたと伝えられますが、現在は五穀豊稔を祈念して本宮社例祭の折に舞われています。この特徴ある鹿踊りは、分布する区域としても県内の南限であることから、市指定の民俗芸能として保存継承されています。



10 熊野堂十二神鹿踊



11 本宮社 牛王宝印



12 新宮社 牛王宝印



13 那智社 牛王宝印

## ●名取熊野三社の牛王宝印

熊野牛王宝印(ごおうほういん)は俗に「オカラスさん」とも呼ばれ、カラス文字で描かれた熊野山独特の御神符です。その起源は明らかではありませんが、熊野の主祭神、家津御子神と天照皇大神との高天原(たかまがはら)における誓約、あるいは神武天皇東征の際の熊野島(ヤタガラス)の故事に由来するとも言われています。御神符は、熊野の神々を信仰する人々を災厄から護るものですが、中世以降になると、誓約書や起請文(きしょうもん)の用紙としても使われるようになりました。

# 熊野新宮社と熊野信仰



明治22年 熊野神社見取図



新宮社宿坊跡位置図

## ●熊野新宮社

元々は新宮社でしたが、明治以後は現在の熊野神社と称するようになりました。主神は速玉神(はやたまのかみ)を祀り、東北地方屈指の熊野神社の一つとされています。新宮社の史料上の初見は、暦応4年(1341)平泰経の寄進状(熊野神社文書)ですが、名取熊野の成立は平安時代末の12世紀頃と考えられており、新宮社もその頃にはあったものと思われる。当社が成立以後、武士などをはじめとする多くの人々から信仰を集めた事は、所蔵する古文書や文化財などから知る事ができます。また、伊達氏の時代においても、永正11年(1514)種宗が神領の租税を免除したことを先例に、晴宗・輝宗・政宗による免除が行われ、江戸時代以後も、歴代の藩主による種々の寄進や保護を受けており、伊達家との深い結びつきがあった事が知られています。

社殿は貞享年間(1684~1687)に書かれた古絵図や安永2年(1773)成立の『熊野三山古跡書上』、文化13年(1812)成立の『奥州名所図会』などから、現在の拝殿がある位置に長床(昭和13年に廃され現在の拝殿となる)が建ち、その奥の玉垣で囲まれた聖域(奥の院)内に、本殿や名取老女宮が建っていた様子が分かります。また、明治以前は今の鐘撞堂付近に文殊堂がありましたが、明治の神仏分離令によって、当社にあった仏教関連のもの(一切経・仏具など)と一緒に境内外の現在地(境内の入口脇)に移されています。その他、『封内風土記』(1772)や安永年間(1772~1781)に成立した『安永風土記御用書出』などの記録から、すでにその当時は10坊前後に減っていましたが、かつては旧参道の両側に「別当坊」や「学頭坊」をはじめとする多数の宿坊が建ち並んでいた様子もうかがわれます。

さらに、当社には、県指定民俗文化財の熊野堂神楽・熊野堂舞楽や関連する多くの文化財が伝えられています。



14 熊野神社文書



15 熊野神社本殿

## ●熊野神社本殿と老女の宮

拝殿の背面に3棟並んで建てられており、中央が証誠殿、向かって右側(東側)が那智飛龍権現社、左側(西側)が十二社権現社です。いずれも素木造りの建物で、屋根は柿葺(こけらぶき)と呼ばれる薄い木板を重ね合わせて葺かれています。証誠殿と那智飛龍権現社は一間四方の社で、県内唯一の熊野造(岡木入り春日造)と呼ばれる様式の建物であり、十二社権現社は桁行三間・梁行一間の流造(ながれづくり)の様式で建てられています。建築年代は、証誠殿の勾欄擬宝珠(こうらんぎぼうじゅ)の正保2年(1645)の銘や、寛文4年(1664)仙台藩4代藩主伊達綱村造営の棟札があり、改築か再建かは定かではありませんが、江戸時代初め頃には建てられていたものと考えられています。この3棟は、熊野信仰にかかわる建築様式で建てられた近世初頭の貴重な建造物として重要である事から、宮城県の有形文化財に指定されています。また、十二社権現社の西隣には、熊野三社の勧請伝承にかかわる名取老女を祀った老女の宮もあります。



16 熊野堂神楽



17 神楽面



18 熊野堂舞楽



19 舞楽面



20 宮太鼓(いびつ太鼓)

## ●熊野堂神楽と熊野堂舞楽

熊野堂神楽は、文治年間(1185~1190)に京都神楽園から伝わったとされる出雲流の岩戸神楽で、仙台周辺および県南部に分布する神楽の元祖と言われており、詞章(しじょう)を唱えることのない黙劇の祈禱の舞で、随所に修験の呪法の名残が見られます。伝わる演目は十二番の他に番外の十三番があり、舞人は神楽面(舞の種類によって付ける面も違う)を付けた世襲の社家7軒が務め、伴奏は、宮太鼓(いびつ太鼓)、大拍子、笛の三楽人が行います。神楽は、春と秋の例祭の時に、常設の神楽殿で披露されます。熊野堂舞楽は、山形県の山寺立石寺系のもので渡来楽人の林家(大阪の四天王寺楽人)が伝えたと言われており、仙台市木ノ下の白山神社にも同系の舞楽の一部が伝承されています。舞楽とは、雅楽の伴奏に合わせ舞われる踊りで、遠くインドや中国・朝鮮などから日本に伝わってきた外来の芸能です。演目は現在五曲が舞われており、宮太鼓(いびつ太鼓)と横笛の楽人が務める伴奏と舞楽面を付けた舞手は、代々7軒の社家によって相伝され門外不出とされています。舞楽は、春の例祭の時に、ご神池に設けられた水上の特設舞台の上で演じられます。この貴重な神楽と舞楽は、県の指定文化財になっています。

## ●木造狛犬

狛犬は、平安時代頃に中国を経て高麗(こうらい)・こま)から伝わった、神仏の魔よけと聖域を守るものとして親しまれてきました。当社の狛犬は、雄と角と渦を巻くたてがみがあがる阿形(あけい)・左側)と、雌で角が無くてたてがみも肩から背中にかかる吽形(うんぎょう)があります。用材はカツラで、漆塗り痕跡が残り、江戸時代以前の製作と推定されています。



21 木造狛犬

## ●熊野新宮寺

真言宗の熊野山新宮寺と称し、本山は京都醍醐山報恩院で、本尊は不動尊を祀っています。史料上の初見は、熊野神社文書中の天正3年(1575)に伊達輝宗が出した神領の租税免除状です。『封内風土記』によると、別当寺として学頭坊・別当坊が新宮社の一切の社務も司っていた事が知られますが、明治の神仏分離令で新宮社と分離され、それ以降、新宮社に伝わった一切経や文殊菩薩像を蔵する文殊堂は、新宮寺が管理するようになりました。また、寺の裏側には、かつて別当寺があったとされる寺山地区から移設した、弘安9年(1286)銘の大型の板碑も残されています。



22 熊野新宮寺



23 寺山の板碑

●**新宮寺文殊堂** 新宮寺文殊堂は、もとは新宮社境内の鐘撞堂付近にありましたが、明治の神仏分離令により現在地に移され新宮寺の管理となっています。文殊堂は、天平年間（729～749年）に聖武天皇の勅願所として行基により建立されたものと伝えられています。



24 新宮寺文殊堂

●**熊野新宮寺 文殊菩薩像と四眷属像**

新宮寺文殊堂には一切経などと共に、本尊である「文殊菩薩」と、つき従う「善財童子(ぜんざいどうじ)・「仏陀波利三蔵(ぶつたはりさんぞう)・「最勝老人(さいしょうろうじん)・「優填王(うてんおう)」の四眷属像(けんぞくぞう)が伝わっています。獅子の上に乗る文殊菩薩像は、奈良時代に活躍した僧行基の作とも言われています。近年まで彩色された特徴から江戸時代の作と考えられていましたが、詳細な調査の結果、平安時代中期以降に見られる「寄木造(よせぎづくり)」の技法で作られており、平安時代末～鎌倉初期頃の作と考えられる事や、一切経の経巻中にも見える慈恩寺(山形県寒河江市)に伝わる文殊菩薩像と技法が類似している事が分かりました。

また、平成25年度に行われた修理の際に、光背の八葉蓮華(はちようれんげ)裏面部分から「修理十頁、作者秀海、文明十五年、七月吉日」と記された墨書が発見されました。内容から、文明15年(1483)の7月に秀海が十頁文で修理を行ったというのですが、秀海と言う人物に関することや、何処で、どこまでの修理を行ったものか詳細は不明です。現在、この貴重な5体の像は、市指定の文化財となっています。



25 新宮寺文殊菩薩像と四眷属像



26 新宮寺一切経



慈恩寺の印記



立石寺の名が見られる経巻



27 経櫃・経筥・経机

●**新宮寺一切経と大般若経** 一切経は仏教聖典を総称したもので、別名大蔵経(たいざうきょう)とも呼ばれています。新宮寺文殊堂には、写経された一切経3,000巻あまりが伝わっており、10巻単位で経筥(きょうばこ)に入れられて経櫃(きょうびつ)に収納されていました。これほど多くの経巻が遺されている例は、岩手県平泉の中尊寺を除くと東日本では他にありません。この一切経の中には、平安時代の終わり頃と、鎌倉時代の初め頃に集中して書写されたものがあり、大半は後者の時期のものです。その後、南北朝の時期に大般若経(だいぱんにやきょう)が写されています。一切経の中には、山形県の慈恩寺や立石寺、仙台市国分寺などから欠巻を補うため移入された経巻や、他寺にある経巻をテキストにして書写された事が推測できる経巻もあり、一切経の書写事業に由緒ある寺々が協力していたことがうかがえます。このような新宮寺一切経は、貴重な文化財として2,568巻が国、411巻が市の指定となっています。この他、写経や読経の際などに使用したと伝わる経机も残されており、墨書から江戸時代中頃に奉納されたものと考えられます。

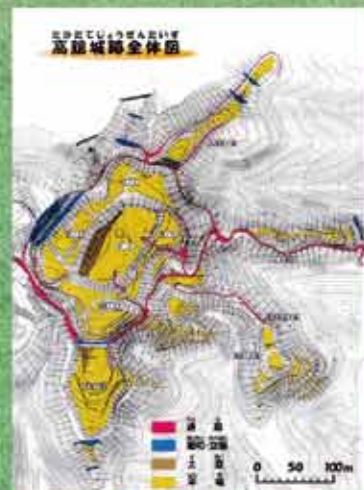
**那智神社と熊野信仰**



●**熊野那智神社** 那智神社は、眼下に名取平野や太平洋、当社の由来や伝説と関係の深い関上浜(ゆりあげはま)を眺めることができる高館山の山頂に鎮座しています。神社の背後の沢には小さいながら滝があり、那智の大滝を御神体とする紀州熊野那智大社の施設配置を模した事がうかがえます。また、明治以前には、当社の北東側150mほどの場所に物智寺(ぶつきょうじ)と呼ばれる別当寺があり、当社の社務を取り仕切っていました。その後、廃寺になってしまいました。

神社の由来は、明和9年(1772)に記された『封内風土記』によれば、「養老3年(719)広浦(今の関上)の漁師治兵衛が漁で引き上げた御神体を家に安置していましたが、ある夜、御神体が光を放ちその指す方向が高館山であったため、そこに宮社を建て羽黒権現として祀ったと云われ、その後、保安4年(1223)に名取老女が紀州熊野那智大社の分霊を合祀(ごうじ)して那智神社と改称した」とされています。旧暦6月10日が例祭で、主神に熊野夫須美神(ふすみのかみ)を祀り、昔は関上浜まで神輿をかついで下る「浜下り」の神事が行われ、正月には「カラスゴ(牛王宝印)」を氏子(うじこ)に配布していました。那智神社に残されている文化財に、鎌倉時代のもを主体とする懸仏・銅鏡155点があり、国・県的重要美術工芸品に指定されています。このような貴重な文化財も残されており、成立当初間もない頃から多くの信仰を集め、中世～近世を通じて伊達家からも手厚く保護されていたものと思われる。

●**高館城** 高館城は、高館山(標高203m)の中腹から山頂付近にかけて築かれた円郭式の山城で、仙台平野から仙台湾を一望に見渡せる場所に位置しています。城の規模は、およそ東西400m・南北500mの範囲におよび、土塁(どるい)や平場などの施設が認められ、中央本丸の周りには、北ノ丸・東ノ丸・南ノ丸・西ノ丸があります。北から南側にかけての3ヶ所の尾根には小規模な平場があり、江戸時代の記録には、平場の1つは藤原秀衡(ひでひら)が館を築き、文治5年(1189年)奥州合戦の折は藤原勢が同城に立て籠もり、鎌倉勢を迎え撃った場所だと伝えもあります。



28 高館城跡

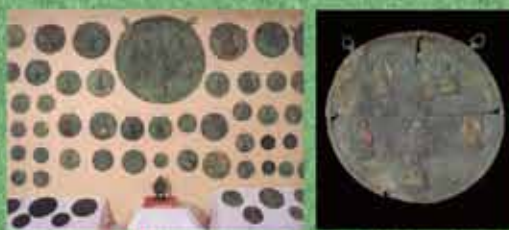
**那智神社と関連施設**



●**那智神社懸仏・銅鏡**

明治31年(1898)那智神社の拝殿移築の時に、多数の懸仏と銅鏡が、社殿床下から杉の皮に包まれた状態で見つかりました。これらは明治の神仏分離令に伴う廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)から守るため、関係者の手により秘かに土中へ埋められたものと思われる。

懸仏は、元々神社に祀られていた鏡に仏の姿を表現して信仰の対象としたもので、柱や軒などに吊るし懸(か)けて奉納した事から、そのように呼ばれています。これらは、当時の人々が日々の平穏や極楽往生を願って奉納したもので、多くは鎌倉時代以降のもので、当社が所蔵する155点の懸仏と銅鏡は、41点が国指定、114点が県指定となっています。



29 那智神社懸仏・銅鏡



30 不動滝



紀州熊野那智社の大滝

## ●奥州三十三観音 一番札所 観音堂

那智神社の北側約150m付近にあるお堂で、十一面観音が祀られています。『養應揆捨録』（1811）には、高館山上に仏閣があり、ここに關上海中から出現した十一面観音が、羽黒権現と一緒に相殿されたと伝えており、奥州順礼第一番の札所とも記されています。奥州三十三観音は、名取老女の創設によるものと伝えられ、熊野三所権現が名取の地に勧請されたのに感謝した老女が、熊野を「礼はじめ」として、西國にない三十三所の観音霊場を定めたこととされているものです。市内には、観音堂の他に、二番・三番・五番札所がありますが、現在の札所については、宝暦11年（1761）に気仙沼の三十番札所 補陀寺（ぼたじ）の僧達によって定められたものと言われています。



31 観音堂

## ●那智の滝

紀州の那智大社は飛龍権現（ひりゅうごんげん）とも言われ、御神体であった那智の大滝は、落差130mを超える大滝です。一方、那智神社の南西側の背後にも小規模ながら滝があり、石造の不動尊が祀られています。文化8年（1811）に記された『養應揆捨録（のうじんあいしやろく）』には、瀬中に「石體の不動明王」が立つ事にちなんで「不動瀬」と呼び、現在は飲めませんが、この瀬水を飲めば忽ち（たちまち）病氣が平癒するとの村人の話を載せています。

# 熊野三山の関連施設

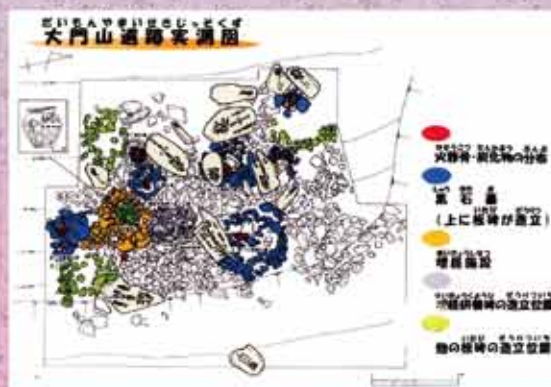
## ●大門山遺跡

大門山遺跡は、熊野新宮寺の南西側に位置し、寺ノ沢と院ノ沢と呼ばれる沢に挟まれた丘陵の南斜面に立地しています。発掘調査の結果、250基あまりの板碑（いたび）の他、埋経（まいきょう）施設や火葬骨を納めた集石墓群などが発見され、位置や性格などから熊野信仰布教にかかわった人々の墓所や、熊野三山を信仰した人々の供養所であったと考えられています。

名取市は、県内でも板碑が数多く分布する地域の1つですが、この大門山付近にその大半が集中しており、詳細に調査を行えば、遺跡内には少なくとも300基以上の板碑が存在するとも言われています。このように、大門山遺跡は県内最大規模の墓所・供養所であり、中世における墓制・葬制を研究する上でも重要な遺跡とされていることから、市の市指定文化財となっています。



32 大門山遺跡



見つかった埋経施設・集石墓群

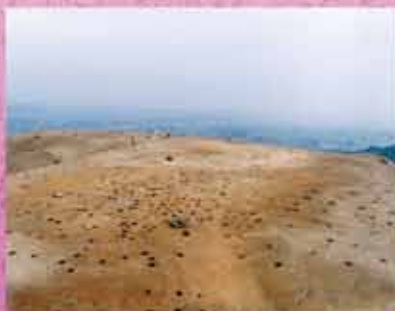


33 埋経施設から出土した常滑焼

## ●熊野堂大館跡

熊野堂大館跡は、本宮社から南に約800m、標高210m前後の丘陵先端に位置し、三方が深い谷に囲まれている立地は、まさに天然の要害と言ったことができます。この館跡は、『仙台領古城書上』記載の「黒崎城」、『安永風土記』記載の「黒崎館」に該当するものと思われ、規模は東西150m、南北600mで、南郭・中郭・北郭の三郭があり、いずれも円郭式の造りとなっています。

発掘調査の結果、南郭では土壘と空堀に囲まれた各平場から、32棟の掘立柱（ほったてばしら）建物跡の他、門跡、櫓列、塀跡、湧水施設などが発見され、北郭からは三段の平場と曲輪（くるわ）から規模は小さいが、54棟もの掘立柱建物跡が発見されています。また、出土品には中世陶磁器類や、「かわらけ」などの土器類、斧や鏃（やじり）などの鉄製品、段や石臼などの石製品、中国産の古銭類などが出土しています。館跡の存続年代は鎌倉～室町時代（14世紀～15世紀後半）頃と見られ、熊野三社とかかわる施設が立地する熊野三山（高館山、大門山、五反田山）に囲まれた位置にある事などから、熊野信仰布教に関わった修験集団の政治・軍事・宗教面での拠点施設であったと考えられています。



北郭で見つかった建物跡



南郭の遠景



34 熊野堂大館跡

## ●熊野堂大館跡出土遺物

熊野堂大館跡の出土品の内、昭和59年の調査時に中郭から出土した常滑焼の大甕・中甕・摺鉢、古瀬戸の灰釉瓶子（かいゆうへいし）一對・灰釉鉢子（かいゆうちようし）・灰釉平茶碗の計7点の中世陶器については、県内の中世の遺跡から出土した遺物の中でも、比較的年代的が古く、鎌倉末～室町初めの館跡で使用された一括性のある出土遺物として貴重であり、市の指定文化財となっています。



35 熊野堂大館跡出土遺物

# 名取熊野三山 文化財まっぷ



- 凡例**
- 国指定文化財
  - 県指定文化財
  - 市指定文化財
  - 市登録文化財

- |           |            |            |              |            |             |              |
|-----------|------------|------------|--------------|------------|-------------|--------------|
| ① 名取老女の宮  | ⑥ 鳥の宮      | ⑪ 本宮社 牛王宝印 | ⑮ 熊野堂神楽      | ⑳ 木造拍犬     | ㉑ 新宮寺一切経    | ㉒ 観音堂        |
| ② 名取老女の墓  | ⑦ 老女神社     | ⑫ 新宮社 牛王宝印 | ⑯ 神楽面        | ㉓ 熊野新宮寺    | ㉔ 経履・経蓑・経机  | ㉕ 大門山遺跡      |
| ③ 下余田 本宮社 | ⑧ 名取熊野本宮永留 | ⑬ 那智社 牛王宝印 | ⑰ 熊野堂舞楽      | ㉖ 寺山の板碑    | ㉗ 高館城       | ㉘ 埋蔵施設出土 常滑焼 |
| ④ 下余田 新宮社 | ⑨ 小館跡      | ⑭ 熊野神社文書   | ⑱ 舞楽面        | ㉙ 新宮寺文殊堂   | ㉚ 那智神社懸仏・銅鏡 | ㉛ 熊野大館跡      |
| ⑤ 下余田 那智社 | ⑩ 熊野堂十二神鹿跡 | ⑰ 熊野神社本殿   | ㉜ 宮太鼓(いびつ太鼓) | ㉝ 新宮寺文殊菩薩像 | ㉞ 不動滝       | ㉟ 熊野大館跡出土遺物  |

